

六月号から選に参加させていただきました歌人の立花 開（ちちばな はるき）です。口語のみの作品にこれだけ多く触れる機会はあまりなかったので、言葉により近づけたような心地です。よろしく願いいたします。

あの日

うさぎ小屋の鍵をかけ忘れたのは

私です

まちりこ 埼玉県

→恐ろしすぎる独白だ。この感じではうさぎは死んでしまっているだろうし、小学生が自白するには重すぎる。おそらく先生から恒例の「全員顔を伏せて、鍵をかけ忘れた人は手を挙げてください」が行われただろうがそれも挙げられなかった。

何年も、もしかしたら何十年も一人で心に秘め続けていた枷。呪いのように作中主体の青春期を縛っていただろうことは想像に難くない。「～だったらどうしよう」のなかでもトップクラスで起こってほしくないことを手繰り寄せるのが非常に巧い。

ひらがにすることで得る免罪符

神奈川県 ベロニカ

→何の「免罪符」か。私は「まだ無知であり無垢である故許された

い」、という自身への予防線だと感じる。ずるいものだ。

作品は自身が得た「免罪符」か他者に突き付けられたものかはわからない。ただ作為的に「ひらがな」にしたことに気づいてしまったら、その前に戻ることはできない。

違和感や嫌悪感を詩へ昇華するには俯瞰的視点を持つことが大切である。

手酌するあなたの底に手を添える

京都府 合川秋穂

→「あなたの底」がとてもよい。

あなたの心や、手や、記憶や、あなたそのもの、そしてあなたの居る空間に作者の手がそっと添えられる。

この「手酌」は「あなた」自身が他を拒むためのぶ厚い壁となっている。「あなた」は慰められることを嫌う人なのだろうが、どうしようもない孤独が溢れてしまう。孤独の闇の中にいる「あなた」を作者の「手」や優しさをがじんわりとほぐしていく。

梅雨ぐもり猫背直してまた猫背

宮城県 長谷川柊香

→「猫背」のリフレインが良い。そう簡単には治せない癖を「また猫背」と端的に表現している。誰もがそうそう！となる。

多くの人が共感する事象は世に溢れているが、それを詩に落とし込み且つ説明的にならずに完成度を保つのは難しい。身体感覚の優れている作者だ。

私も巻き肩を治したくてよくストレッチをしているが、ふうと一息つくともた巻き肩になる。

そんなにも震えて

川の浅瀬にも

溺れてしまいそうだよ

すきよ

愛知県 あいう

→まだ粗削りだが、この粗さ、勢いこそ詩歌の原動力であると感じる。相手が何に対して「震えて」いるのか分からないが、作者が相手の命そのものと対峙しているような迫力もある。「溺れてしまいそうだよ 好きよ」の呼びかけが「…だよ …よ」と距離を縮めていくのが良い。

あなたのうつした虫歯を

枢までつれていくんです

東京都 翠

→虫歯はうつる。うつったら嫌なものだが、「枢まで連れていく」とは究極の愛であるし、虫歯があっても愛する人との口付けは甘美なものなのだ。

「いくんです」の独白めいた終わり方に盲目的な恐ろしさを感じる。虫歯さえ後生大切に持っておきたいのは、報われなかった恋なのだろう。

この作者の作品からは自分は口語で表現するのだ、という意図がしっかりと伝わってくる。心惹かれるものが多かった。文語より口語で生きる感性、その透明感を大切にしていきたい。

「あめふりの

あなたのけっこんしきのひに

あらう ふたりで

よくきたパジャマ」

「もの思いをするときには裸足になる」

「幸せなとき

天使はのどを鳴らす」も良い作品だった。

君の睫毛に腰掛けて

牡丹の崩れるのを

見ていた

見ていた

愛知県 浅葱

→「勝手に失望された日も

つめだけはカワイイ」とどちらをとるか悩んだ。「君の睫毛に腰掛け」という少女的な感受性が光る。絵にしたくなってくる。「見ていた」のリフレインが牡丹の花びらがぼろっぼろっと崩れていくのをうまく表現している。「崩れるのを」の言葉足らずな感じが次の「見ていた」への世界へ入りやすくしている。

背骨が許してくれないから

仕方なく見つめ合う

京都府 ヒロミヤカザル

→愛している気持ちと、こんなはずじゃなかったのにな、好きになっちゃったよ。という素直になれない気持ちとの間で揺れる複雑な感情。意地を張り続けるのは疲れるもので、「仕方なく」に怠さや素直になりたい葛藤が伺える。

「背骨が許してくれない」なんて言い訳にもならないけれど、不器用な2人が見つめ合うためには必要なのだ。

羊羹にそのままかぶりつく夜の

四月のような寮の流し場

茨城県 豊富 瑞歩

→泣いている、と感じた。実際に泣いていなくても、悲しいことがあったわけでもなく、この作品は心が泣いている。

寮の流し場を淡く照らす月光と、何かにかぶりつかずにはいられなかった作者の背中が浮かぶ。「四月のような」という直喩は一読すると大掴みとも思えるが、大掴みだからこそ新年度の不安感や初春のひんやりした風を感じ、訳もなく心細くなる春の、寂しさへの共感の幅が広がっている。他にもよい作品が多かった作者だ。今後も期待したい。

ぺきぺきとエビの素肌を暴き出す

手つきで触られてる くやしい

埼玉県 青木雅 21

どきどきする性愛の詩だ。「ぺきぺき」というオノマトペの容赦のなさ、「エビの素肌」というあの薄ピンクで水っぽい肉質を容易に思い浮かべられる具体的さ。はじめはエビを食べる詩かと思って油断させておいて性愛の世界線へ突然引きずり込まれる。どきどきする。初めて好きな人に触れられる戸惑いや恥ずかしさを「くやしい」と思ってしまう心が、キラキラと光る。

ちゅーちゅる

ちーちゅる

恋の歌か

腹減ったのか

千葉県 桜咲 16

→ついつい、猫の大好きなゼリータイプのおやつので CM ソングが
浮かんでしまった。

おやっ、と読み手の心を奪う作風で、幅が広く、自由な感性の作者
である。

正岡子規の「恋知らぬ 猫のふりなり 玉遊び」を思い出した。

まだ恋か空腹かわからない少女、恋より玉遊びに夢中になる少年、
でも本当は何より恋に心惹かれている。

ちこくちこくちこく

アネモネみてちこく

東京都 細村 星一郎 20

→あまりに可愛らしく、一読して覚えてしまった。私の考える口語
詩歌は、文語のように言葉を飾るものが少なく、より一層感受性の
直球勝負という感じがする。この作品に使われている単語は「アネ
モネ」と「ちこく」のみ。それなのに平仮名の中に入った「アネモ

ネ」に花卉の瑞々しさを思い浮かべることができるし、繰り返される「ちこく」や作品の早口言葉のような勢いに作者が小走りになっているせわしなさを感じ取ることができる。言葉の可能性を改めて学ぶことができた。今後遅刻をしそうなときに使いたい（アネモネを見ていなくても）